

あゆみ通信

VOL. 113

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

教区同朋大会にご参加を！



2018年5月26日(土) 午前10時から難波別院本堂で第44回大阪教区同朋大会が「つながるいのち、託されたいのち」をテーマに開催されます。

「考え方や生き方の違う違う者同士の対話出来る関係や、ひとりが抱く不安や悩みや弱さを表現できる居場所は、どのようにして、成り立っているのでしょうか。私たち真宗門徒の生き方が問われています」

今回の感話では、第2組の浪花益夫氏(法山寺)が登場されます。ご期待ください。

内容 お勤め、
感話、法話
講師 酒井 義一
先生(東京教区存
明寺)



酒井義一師



浪花益夫氏

参加費 1000円
申込み お手次
のお寺へ。

第2組門徒会員研修 大会兼あゆみの会 第1回例会開催



2018年4月13日(金) 午後1時30分から、天王寺区の南照寺(友澤秀三住職)をお借りして2018年第2組門徒会員研修大会兼あゆみの会第1回例会が開催され、門徒推進員17名と海老海恵幸組長(了安寺)、喜左上恵子組長補佐(紹隆寺)、松本隆信副組長(西教寺)の参加をいただいた。吉田雄彦副会長(法山寺)の進行で、真宗宗歌で開会。挨拶を中嶋ひろみ門徒会会長(光照寺)頂いた。引き続き「念仏者とは？」をテーマに、友澤秀三先生(南照寺)からお話をいただいた。先生は行動力のある、グローバルな体験をされているが、そのことが仏法とどう結びついたのか。そして善導大師の「二河の譬え」を小道具を使ってやさしく紹介されながら、①凡夫とは②浄土真宗の救済③念仏について話された。そして「歎異抄」にある「念仏者は無碍

の一道なり」を紹介され、「聞いて聞いて聞き開く」そして「問いを持つ」ことが大事なことと結ばれた。(2面)

教区全推進員の 集いに第2組から 沢山の参加が

2018年4月15日(日)

午後1時30分から、南御堂難波別院本堂で、第11回大阪教区全推進員の集いが開催され、多くの第2組から参加があった。真宗宗歌で開会し、勤行。そして宮浦一郎教務所長挨拶の後、意見発表は第2組の細川克彦氏(佛足寺)、そして喜左上恵子住職(紹隆寺)と20組の御門徒。そして記念法話は第2組即應寺前住職の藤井善隆先生であったから。



満堂の中で藤井善隆先生は「人身受け難し」ということについて、板書もされながらやさしく、具体的に説明された。

聞 け ら ょ う で

2008年に養成講座を修了して10年。お手次の即應寺で、また第2組でお育てをいただいて、まがりなりにも仏法を聞いてきたつもりですが、いざとなるとまだまだ聞こえていないと、折に触れて実感することです。

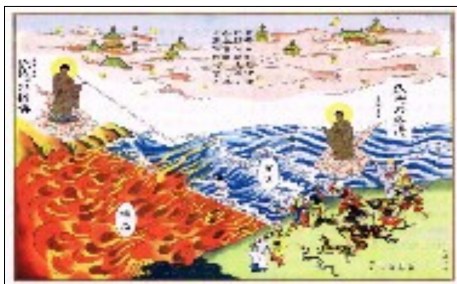
つらいことも、悲しいことも、苦しいことも、そして嬉しいこともすべてがお育てといただいて、あゆみの会やご門徒の仲間と共に、いのち終るまで仏法をいただいて生かされ、生きて行きたいと思います。合掌。(本)

釈迦の発遣と弥陀の招喚

第2組門徒会員研修 大会兼あゆみの会 例会報告 友澤先生の法話から



(企業で働いていた先生が趣味のバイクで事故を起こし、自分のしたいことをすると決めて全てを投げ出して沖縄諸島への旅に行った思いを、小道具を使いながら善導大師の「二河の譬え」を自身で作った歌詞として紹介された)



・ 旅人ありて 西へ行こうと百千里/突然前に二つの河が現れる/南は火の河 北は荒れ狂う水の河/中間に幅15センチの道が見える/遙かな荒野、旅人は一人/南も北も河で渡れない/ふと振り返ると東から/群がり集まるゾンビ/河の広さはおおよそ百歩深さは分からない/白い道を波があらひ炎が焼く/見渡す限り東の地平線からゾンビ/目指す旅人に迫る、もう囲まれた/引き返そうにも逃げ場はない/止まってても死はまのがれない/道を進めば火と水だけど/それでも俺は渡ろう/おお、釈迦はいう、この道を行け/ああ、弥陀が呼ぶ、きみ来たれ

と/戻ってこいよ、危険な道さ/きっと落ちるよ(助けてあげる)/おお、釈迦が言う、この道を行け/ああ弥陀が呼ぶ、きみ来たれと。

何をどう例えているか。

東岸→火宅無常のこの娑婆世界。

西岸→極楽浄土。悟りの世界。
南は火の河→我々衆生の怒りや憎しみの煩惱。感情が火の有様。

北は水の河→我々衆生の貪り、渴愛の煩惱。感情が水の有様。
幅15センチの道→怒り、貪りの煩惱の中にあって、真実の世界に生まれたいと思う心。

遙かな荒野、旅人は一人→常に悪友に従って、本当に良い親友にあっていない有様。

群がり集まるゾンビ→「色受想行色」(五蘊〈ごうん〉)が活発になって、「眼耳鼻舌身意」が様々な「妄念」「妄想」を、作り出す有様



白い道を波が洗い→渴愛の執着心が、仏教を求める心を常に汚染すること。

炎が焼く→怒り嫌う心が、仏のもとらす福德を焼き払う。

俺は渡ろう→凡夫が転回させられて、菩薩道を歩むに等しい「信心」を得ること。

釈迦が言う、この道を行け→お経が、人間らしい人間にな

ろうよと、勧めていること。

弥陀が言う、

君、来たれと→今もずっと「必ず救う」南無阿弥陀仏が待っていること。

戻ってこいよ→別の宗教や迷信の勧誘で、結局自ら罪を作っておじゃんになること。(中略)念仏者としておさえておくべき文言がある。親鸞聖人が皆さんのお口を借りておっしゃっている言葉です。

「念仏者は無碍の一道なり」

僕にとってお念仏を称えるということは「飛躍」でした。端的に言えば念仏者とはお念仏する人のことを言う。念仏とは「南無阿弥陀仏」です。その「南無阿弥陀仏」が如来の手の中にある時は名号と言う名前。それが私のところへ届いたら信心と言う名前になり、それが口から「南無阿弥陀仏」とこぼれ出るとお念仏。全部「南無阿弥陀仏」以外の何ものでもない。

その「南無阿弥陀仏」の内容を聞くことが聞法です。何を聞かせていただくか。阿弥陀仏の願い。「仏願の生起、本末を聞きて疑心あることなし」(「教行信証」信巻)

この「生起本末」は聞いて聞いて聞き開いて行かねばならない。そして問いをいただいて帰る。このことを聞法していくということは、ずっと聞き開いていく。様々の先生や様々の体験からそれを聞いていく。そのことを続けていかねばならないと考えています。

(法話の要約は、事務局です)

